

# インタビュー 海老沼 正幸氏（樹木医）

2023年6月3日 長崎市多以良町 海老沼造園にて  
インタビュアー：宮島達男



インタビュー風景  
(写真左：海老沼氏、右：宮島達男)

## 被爆柿の木との出会い

**宮島** 海老沼先生は樹木医でいらっしゃいます。樹木医とは、どのようなお仕事ですか？

**海老沼** 樹木も人間と一緒に、虫に食われたり、病気になったりします。そういう時に診断して、こういうふうにしたら治りますとか、こういった薬をかければよくなりますよとか伝える、アドバイザー的な仕事です。私は造園業をしていましたが、造園の仕事をしていると、樹木の診断の依頼もあるんです。

**宮島** 樹木医のお仕事を通じて、ある日、被爆した柿の木を治療してほしい、という依頼があったんですね。その木と出会ったときのことを教えてください。

**海老沼** 僕が樹木医になったというニュースをテレビで見た柿の木のオーナーさんから、「ちょっと見てもらいたい」という電話があったのが始めです。

**宮島** 初めて被爆柿の木をご覧になった時、どのように感じられましたか？

**海老沼** 葉の色が青々したものではなく、少し黄色みがかっていて、見ただけで、「これは先が危ないな」「治療しなければどうにもこうにもならないだろう」と感じました。ただ、治療したら治るかどうかも分からない。そのぐらいひどかったので、自分としては半信半疑でやったということを、今でも覚えています。

**宮島** 当時の写真が残っていますが、木の幹の部分が黒こげでケロイド状になっていて、半身が穴ぼこみみたいになっていましたよね。

**海老沼** そうです。僕はその時に初めて、「炭化」って言葉を使ったんですが、最初は、冬にこの木の近くでたき火でもして、それでこういう風になったのかと思いました。ところが、そこへちょうど近所のおばさんが出てきて、「いやいや、原爆でこんな風になってしまったんですよ」と言う。それで初めて、黒くなったのが原爆で焼かれたからだ、と知った。それはもう、すごくショックでした。原爆の恐ろしさというものを、まざまざと思い起こさせるような姿でした。

**宮島** 治療の申し出があったというのはいつぐらいですか？

**海老沼** 1994年くらいでしょうか。

宮島 それまで黒こげのまま、50年近く放置されていたということですか？

海老沼 そうそう。そういうことです。

宮島 被爆してからずっと、今ある場所に半分枯れたような状態であった、ということですよね？

海老沼 柿の木が植えてあるところがちょうど通路になっているんですけど、今のオーナーさんは、その通路のところに車を入れられるように、車庫を作ろうと思ったらしいんですよ。それで、自分のお父さんに「木を切って車庫を作る」と言ったら、それは大変怒られたらしい。オーナーさん曰く、「父は、原爆で同僚や親戚などたくさんの方が亡くなった中で、木のことを“生き証人”みたいに思っていたんじゃないだろうか」ということでした。

宮島 それで、黒焦げの木を治療して生き返らせるために、海老沼先生に連絡が来たんですね？

海老沼 そうです。

宮島 その時が、先生が被爆樹木と出会われた一番初めですか？

海老沼 そうです。それまで僕は樹木医として、もう何百本も治療してきましたが、被爆樹木はこれが初めてでした。長崎市が指定している「被爆建造物」というものがあるって、建築物だけじゃなく、植物もリストに入っているんです。

宮島 長崎市が、「これは被爆樹木である」と指定するんですね。

海老沼 例えば、山王神社にクスノキがありますが、あれは被爆樹木の中の「Aランク」に指定されています。爆心地から非常に近いところにあれだけの大木が生き残っているということで、Aランクになっているわけです。柿の木プロジェクトで2世を育てている柿の木も、きちんとした資料があって、長崎市がAランクと認めているものです。

実は被爆した柿の木はまた別なところにもありまして、僕はそれも治療しているんですよ。どういうわけか柿の木は多いんです、海老沼さんではなく「柿沼さん」なんて言われるぐらい。

宮島 私も95年に長崎でリサーチをしている時、被爆樹木の資料があったので、何本か見に行きました。資料には柳もあつたりしましたが、一番多かったのは柿の木でした。

海老沼 ああ、やっぱりね。柿の木は落葉樹ですから、葉っぱが落ちてまた翌春に芽が出てくる、ということを繰り返している。だから、被爆した部分が黒焦げになっても、案外、反対側から芽が出てくるのかもしれない。松とか杉などの針葉樹は、原爆にあうとほとんど枯れてしまいます。それに比べて落葉樹、広葉樹は生き残っているものが多いのかなと思います。

宮島 それで先生が治療をされて、木はだんだん良くなっていったわけですね？

海老沼 まあ、治療はしました。しかし、日本では、被爆した樹木を治療



被爆した柿の木 (1996年撮影)



治療を施された柿の木 (2005年撮影)

したという前例がない、つまり治した人がいないんです。それで僕も、昔勉強したいろいろな本なんかを見ながら、こう治療したらこうなる、という確信がないまま手探りで治療した、というのが実際です。

**宮島** しかし治療は成功し、たくさんの実がなったわけですね？

**海老沼** そうですね。原爆に遭ってから一度も実がならなかったらしいんですが、治療が終わったその年に、たくさん実がなりました。僕は、実がなった時に一瞬、「もう枯れるのかな？」と思ってヒヤッとしました。というのは植物は、枯れる前にたくさん実をつけるんです。子孫を残そうという働きが出てきて、枯れる前にたくさん花を咲かせたり、実をつけたりするものなんです。だから、実がたくさんなったので、枯れるのかと思った。けれども、見事にそのまま蘇生した訳です。

**宮島** その被爆柿の木の实から種を取って2世を作られるようになりました。そのきっかけになったことはありますか？どういう思いでなさったんでしょうか？

**海老沼** もしこの親の木が枯れてしまったら、もう二度とこの世の中に「被爆した子孫」というものがもうなくなってしまう。そうさせないためには、苗を作らないといけない、と思いました。

樹木医の勉強の中で、「絶滅しかけているもの、なくなってしまいそうなものを育成しなさい。育てることは大切ですよ」ということを教えてくれた先生がいたものですから、「これもそうだな。枯れてしまったら、もうこれで終わりなんだな」と思いました。それで、せっかくこれだけたくさん実がなったんだから、何とか2世を作ろうと思いました。

それと、もう一つ大きな理由があって。うちの家内が、被爆2世なんです。ですから、家内と同じ2世なんだということも頭にありました。それでオーナーに、実をいくつかいただけないだろうかと言いました。この木が枯れる前に子孫を作って、この親の木の近くに植えておきたいんだ、とお願いした記憶があります。

**宮島** それで、この柿の種から芽が出て、苗木が生まれてきたんですね。

**海老沼** 見事に発芽しました。かなり発芽して、苗として育ったのが300本ぐらい。それと、早く実をつけられるようにしなければというので、接ぎ木をしました。全部で200本ぐらい接ぎ木したと思います。ですから、初めの年に、苗として人にあげられるように育てたのが合計500本です。



海老沼造園で育つ被爆柿の木2世の苗木

宮島 被爆した柿の木の種というのは、健康な親の木から採れたものと同じなんですか？

海老沼 いや、厚さがかなり薄いです。

宮島 そこから、よくそんなにたくさん育てられましたね。

海老沼 そのままでなかなか育たなかったの、色々やり方を変えながら育てました。発芽剤を水に浸してから種をまいたり、たくさん方法を試しました。

宮島 苦労されたんですね。植えた柿の種から育つのは、何パーセントぐらいですか？

海老沼 大体1%か2%ぐらいでしょう。種の中から、芽が出そうなものを選んで蒔いているから案外、発芽率はいいんですけども、それでも採取した種全体からしたら、1%ぐらいです。だから、かなりの数の種を採取しないとイケないですよ。

宮島 そうやって育てた苗木を、どのようにされたのですか？

海老沼 せっかくこれだけ育てたんだから、長崎に平和学習で来られる生徒さんにあげたいな、と思いました。原爆というものが二度とないように、長崎が最後の被爆地であってほしいと思い、全国の、まずとにかく1県に1本ずつ植えて、それを育ててもらえたらいいな、と思ったのが苗木を配り始めたきっかけです。

宮島 それで、修学旅行に来られた生徒さんたちに、苗木を配るようになったんですね。

海老沼 そうです。皆さんによく説明すると、喜んで持って行ってくれるんですよ。

## アーティストが訪ねてきた日

宮島 ちょうどその頃でしたか、私が「苗木を見せてください」って電話をかけて、先生のところに伺ったのは。

私は「被爆柿の木から苗木を生み出して、2世を育てている先生がいる」という新聞記事を読んで、1度見てみたいと思って電話をかけました。でも、最初は先生、ちょっと何かこう怪しんでいらっしゃる感じでしたかね？ 最初にお会いしたときのことを、覚えていらっしゃいますか？

海老沼 もちろん、宮島先生との出会いの記憶は、最初に電話で話をしたときのことから全部、鮮明に残っています。ただ、苗木を配り始めた頃は、もう色んな方から電話があったんですよ。何て言うか、嫌がらせという訳でもないんでしょうけれど、「よくそんな馬鹿げたことをやっているな」とかという電話があったり、「誰もしていない、立派なことをしているね」という電話もあったり、とにかくたくさん電話がありました。宮島先生は、その中の一人だったんです。だから最初は僕も、またからかいの電話かなと？いうぐらいに思っていたんです。

電話が掛かってきて、その日にすぐどうぞ、という話にはなりませんでしたが。ちょうど僕が忙しかったのもあって、1日か2日後だったら空いているからいいですよって言ったら、「それでもいいです」と言ってきたのが、宮島先生との初顔合わせでした。最初見た時、やくざ屋さんかなあ、遊び人かなあ、何かあって。ほんとうに失礼しましたが、僕はアートとかそういうものに無関心だったもんですから、その頃から有名人だったんでしょうけれども、僕は全然分かんなかった。もう、坊主頭でね。うあ、やんちゃな青年が来たなという感じですね。ナップサックをこう背負ってね。来られたんです。

宮島 僕は、長崎で「水の波紋」展という展覧会に参加して、作品を制作して展示することになっていて、原爆について色々調べていたんです。それで、電話をかけた2日後くらいに、海老沼先生の事務所に伺いました。

海老沼 僕は最初、この人もひやかしに来たのか、とも思ったんです。というのはね、僕を訪ねて来た人には、そう

いう人が多かったんです、テレビに出たり新聞に載ったりしたので、どんな人間がどんなことをやっているのかと、興味本位、遊び半分に来た人も多かったものですから。だから、その一人かな？とも思いました。でも、1日も2日も待ってそれで来るんだから、ひやかしではないよねとも思った。

それで、宮島先生がここに来た時の、苗を見る目の鋭さというか、感激した目というのかな。そういった目の輝きがすごく印象に残っています。その時すぐにね、宮島先生が「これを応援させてください」って「私に手伝わせてください」と言って帰られたんですよ。すごい人が来たと思ってね。最初はやくぎ屋さんみたいな感じだったけどね、帰るときにはこれは立派な人が来た、と、まるっきり印象が変わりました。ああ、この方は本心で一生懸命これをやろう、やるんだと決意している、そんな感じに見えました。

**宮島** とても感動したことを、昨日のことのようによく覚えています。海老沼先生が、奥から20センチぐらいの苗木を持ってきてくださって、それを見た時、本当に柿の苗木がちっちゃくてね。緑がすごく綺麗で、光り輝いていて、もう本当に印象的でした。

それで、展示して里親募集をしたいというお話をさせていただきました。

**海老沼** 里親を募集してこういう風に展示したい、という提案があって、どこに？と聞いたら、美術館に、とっておられました。

**宮島** はい、東京、神宮前にあるワタリウム美術館です。

**海老沼** ですね。あそこに苗木を抱えて持っていきました。

**宮島** 鉢植えを抱えて飛行機に乗って、来ていただきましたね。

**海老沼** 持っていきました、今でも思い出します。あの時は、もう何て言うのかな、自分の思いが繋がったような感じでした。「ああ、これであちこち多くに植樹できる。そしてそこから、平和が生まれてくるんだ」と思って、それはそれは喜んで、鉢を抱えて持っていきました、

**宮島** その時に、海老沼先生が思い描かれていたのは、どんなことですか？

**海老沼** もう、期待でいっぱいでした。里親にたくさんの方が応募してくれればいいなと思っていました。けれども一方で、そんなに来るかな？という疑問も半分半分かな。期待としてはね、たくさん来ればいいと思うけど、実際はそんなにないだろうなとも思ったりしてね。でも初めから自分としては、一つの県に1本ずつでも植えていきたいという気持ちがあったものですから、これでいろいろな県に早く植えられればいいな。いろんな人から応募があればいいなという思いでした。



苗木の展示風景 (1995年、ワタリウム美術館)

## 植樹地の思い出

**宮島** そんなことから柿の木プロジェクトがスタートしました。里親募集の記事を見て、東京・台東区の柳北小学校の、畠山先生という方が申し込んで下さったんです。あの時、10数件の申し込みがあったんですけど、やっぱり畠山先生が一生懸命だったので、まずそこに、ということで植えさせていただきました。柳北小学校に植樹をした時のことで、何か印象に残っていることはありますか？

**海老沼** 印象も何も、まるっきりよく覚えています。とにかく子どもさんが、被爆した柿の木と会うのを待ち焦がれていたような、そんな感じでしたね。

宮島 そうでしたね。

海老沼 僕たちが行ったら、まず作文を読んでくれて、被爆した柿の木がどんな木なのか、もうすごく興味深く待っていてくれた感じがとても印象的でした。それから、木を見て感動したのかどうか分かりませんが、泣いていた子どもさんもいたように思います。僕もやっぱり、すごく感動しました。

宮島 あの時は2本植えたんですよね？

海老沼 そうそうそう・・・2本。かきカキ君と夢柿ちゃん。

すごく温かく迎え入れていただきましたし、担任の畠山先生が一生懸命やってくくださったというのもありますし、とにかく柿の木を庭に植えたことが、非常に印象深かったです。原爆はもうたくさんだ、原爆をなくしてほしいという子どもさんの願いや思いが、強く伝わってきました。

宮島 柳北小学校の子どもたちとは、その後もずっとコンタクトを取っています。10周年に集まって以来、節目ごとに集まってきていて、僕らにも声をかけてくれます。20周年の時にはお母さんになっている人もいて子連れで参加してくれたりしていましたよね。

海老沼 ありがたいですね。



台東区立柳北小学校での植樹式（1996年）



柳北小学校植樹10周年記念イベント（2006年）



植樹から24年後に集まった子どもたち（2020年）

宮島 2013年には、福島の会津の富岡幼稚園で植樹しました。東日本大震災で避難してきた子ども達と一緒に植えましたよね。あの時も先生、感激されてましたけど。

海老沼 そうですね。僕は植樹に行くたびに感激して泣いてしまうのですが、やはりあれだけの震災があっても、頑張っている子どもさん達を見ながら、柿の木にもね、「あなたたちも、この子たちに負けずに育ってくれ」という、そういう思いを込めて植えました。すごく印象に残っている場所です。震災を経て頑張っている子ども達が、柿の木にその思いを託して植えてくれたというのも、また嬉しいことでした。

宮島 ちょうど先生の誕生日で。

海老沼 あの時は、もうびっくりしました。植えるのに一生懸命で、植樹のことだけ考えていたら、いきなりハッピーバースデーが流れたので。

宮島 先生が誕生日だと知って、子ども達が、歌を歌ってくれたんですよね。

海老沼 目の前で全員が合唱してくれて、嬉しかったです。僕は3月生まれなので、毎年、誕生日がちょうど植樹の時期なんですけど、まさか子どもさん達がお祝いしてくれるとは、思っていなかったです。

宮島 98年には海外植樹の第1号として、ジュネーブのWHOの庭に植樹しました。柿の木を海外に持っていくという話を最初にお聞きになったときは、どう思われましたか？

海老沼 すごくうれしかったです。でも、日本から2世の木が旅立つんだといううれしい気持ちの反面、少しだけ

寂しい気持ちもありました。なんだか、自分の娘が遠くに嫁に行くように感じたんですよ。でもやっぱり、日本だけにとどまらず、海外にも植えられるということに感謝しました。

**宮島** あの時は初めての海外ということで、お嬢さんの仁美ちゃんと来てくださいました。慣れない海外でいろいろ大変な思いもされたと思いますが、あの時の植樹で覚えていらっしゃることはありますか？

**海老沼** 世界保健機構の本部に植えるということで、大変に意義のある植樹だったと思います。

**宮島** Googleマップの上からの写真で見ると、今でもちゃんと柿の木が写っています。緑の芝生のガーデンの真ん中で、大きく育っているようです。

**海老沼** 昭和天皇のお手蒔き観葉の近くでしたね。

**宮島** そうですね。

**海老沼** そういう、非常に意味のあるところに植えさせていただいたこともあり、大変に感動しました。



WHO本部で植樹の準備をする海老沼氏 (1998年)



ファイアル島での植樹式 (2017年)



ダラスのホッカデイ・スクールでの植樹式 (2000年)

**宮島** 最初の植樹から28年が経ちましたが、この28年間で、特に印象的だった植樹の思い出はありますか？

**海老沼** たくさんありますけれども、ファイアル島は…

**宮島** ファイアル島、大西洋の真ん中にあるポルトガル領の島ですね。

**海老沼** そこに行ったらなかなか帰ってこれなくて、大変な思いをしましたね。波があったら帰って来られないとか、色々ありました。

**宮島** 天候の関係で、船が出ない、飛行機も飛ばないということが1、2日あり、足止めされちゃったんですよ。

**海老沼** あの時は本当に、このままいつまで帰れないのかな？とか色々考えました。けれども、あぁいったトラブルがあると、改めて思い出がまた一段と鮮明になるようにも感じます。

**宮島** イギリスのグラスゴーの植物園で2001年に植樹した時、ファイアル島出身のペロニカさんが留学生としてそこにいた。植樹を見て大感激して、いつか自分の島にも植えたいと思って17年間ずっと頑張って、いよいよ植樹が実現することになった。それで呼んでくださったんですよ。

**海老沼** やっぱりその話、自分の島に植えたいというその思いを17年間断ち切れなかったという話を知ったら、是非、どんなことがあっても行きたいと強く思ったので、行きましょうということにしたんですけど、行く前に、宮島先生からは「本当に大丈夫ですか？」と念押しされていました。それなので、足止めされたときは宮島先生から「ほら、やっぱりね」と言われました。けれどもまぁ、色々ありましたけど、しかし楽しかったですよ、あそこね。

**宮島** それから、原爆を落とした国、アメリカにも行きました。

**海老沼** ダラスですね。アメリカの子どもさんが、原爆に対して非常に強い関心を持っていることにびっくりしました。原爆について、日本の子どもよりも勉強しているのではないのでしょうか。原爆を落とした国だからこそ、それだけ原爆の恐さを教えているんだらうかと思いました。

**宮島** 担当されたディー先生という方が特に一所懸命で、事前のワークショップを通して、子ども達に原爆の恐ろしさをよく伝えてくださっていました。

**海老沼** 子ども達が、僕が思ったよりもずっと深く学んでいて、びっくりしました。日本では、原爆についてそんなに教えていないところもありますから、あの子どもさん達は印象的でした。

**宮島** 国や地域によって子どもたちの反応も様々ですが、そんな中で、日本との違いを感じることはありますか？

**海老沼** うーん。たくさんありますね。日本の子ども達は、手袋をして、そして小さいスコップを持って土を入れる・・・そういったことをします。手や服や、周りを汚さないように、行儀よく土をかけるんです。でも海外に行ったら違うんですよ。土を直接手で持って植える。スコップではなく自分の手、両手で土を抱えて木の元に持って行って、一生懸命植える。そういうやり方です。あれは感動します。

**宮島** 先生には、各地で催されるセレモニーに出ていただいたり、特に海外の植樹では旗を持ってパレードに参加していただいたりと、色々とお苦勞をおかけしていると思います。実際に参加なさって大変だったことや、でも報われたなと思われたことはありますか？

**海老沼** いや、大変と思ったことはありません、一つもありません。この木から平和が生まれてくるんだ、ということが一番に思うので、ですから、旗を持ってたくさん歩いたとかいろいろありますけれども、そういったものは、全く苦にはなっていません。



イタリア・プレシアでパレードに参加する海老沼氏  
(2008年)

## 未来に向けたメッセージ

**宮島** 柿の木プロジェクトはこれからも少しずつですが、まだまだ続いていきます。例えばヨーロッパでは、法律が変わってEU圏内に植物の苗を輸出することが難しくなりましたが、イタリアの植樹地のメンバーが、日本から送った種子を自分たちで植えて、自分たちの被爆2世の木を育ててくださるようになりました。今、EU圏内の植樹は、彼らが中心になって広がってくれています。

**海老沼** ありがたいことです。

**宮島** 少しずつそうやってつながってきて、これからまたさらに広がっていきます。これから被爆柿の木2世と出会う未来の子ども達に向けて、先生からのメッセージをお願いします。

**海老沼** 今、戦争をしている国もありますが、恐ろしい目にあっているウクライナの子どもたちのようなことが、この地球上にあってはならないと思います。何か、核の存在をちらつかせておるような話も聞きますけれども、核戦争はもう二度と起きてほしくない。誰にも、二度と原爆の恐ろしさを味わってほしくないと思います。原爆は、人間を殺すだけの兵器です。原爆を落とすことはもちろん、作ることも保有することも

なくなるよう、核兵器が1日も早くこの地球上からなくなって、みんなが安心できる世の中になってほしいなと思います。

我々、長崎に暮らしている人間は、色々な形で原爆の恐しさを見ておりますけれども、これからの子どもさん達が、もう絶対にそういうものを見ないで済むように、海外にも平和が訪れること、日本の平和がずっと続くことを願っております。そのために、被爆した木の2世のことを知り、時々思い出してもらうことが何かの役に立つのではないか、という期待もあります。

**宮島** そうですね。そのために、まだまだ頑張って、世界中に少しずつでも広げていかなくちやなりませんね。

**海老沼** ここまでで続けてこられたのは、言うまでもなく、宮島先生のサポートがあったからだと思います。感謝しています。

また宮島先生以外にも、色々な方からの支援を受けながらやってきました。最初に自分で立てた「一つの県に1本」という目標にも、だいぶ近づいてきたように感じます。これは、皆さんの応援の賜物です。

**宮島** では最後に、これまで植樹をした各地の皆さん、そして、これから植樹を通して柿の木と出会う子ども達や、その子たちを見守る大人たちに向けて、メッセージがあればお願いします。

**海老沼** 皆さんの所にお届けしているのは、私が我が子のように育てた苗です。自分の子どもをそこに住ませるような気持ちでお渡ししています。ですから皆さんも、自分の子どもを育てるような気持ちで、大事にしてくださいと思います。

**宮島** ありがとうございました。これからも、どうぞよろしくお願いします。

● えびぬままさゆき 樹木医

1949年3月7日 茨城県高萩市生まれ。77年より長崎市で造園業を営む。

93年「樹木医」の登録を受け、以来、造園業のかたわら、樹木の診断・治療・保護育成にあたっている。



被爆柿の木2世の芽